

# 鶴見大学図書館蔵『遠嶋百首抄』翻刻・校異

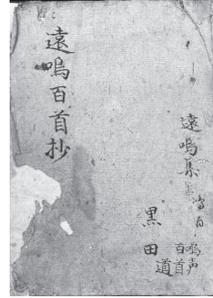
田口暢之

はじめに

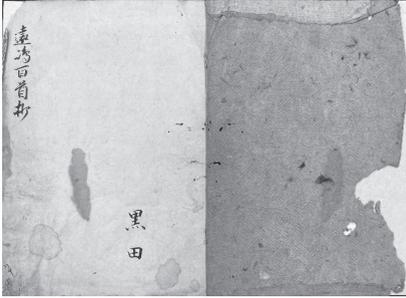
『遠嶋百首』は後鳥羽院が配所の隠岐において詠んだ百首歌で、田村柳壹氏は約六〇本を調査し、五類に分類した<sup>1)</sup>。現在では鎌倉中期写の冷泉家時雨亭文庫本をはじめ、七〇本ほどの伝本が知られるが、いずれも田村氏の分類が適用できる。その三類と四類には古注が付された伝本もある。三類の宮内庁書陵部本（伏・一八八。以下「書陵部本」と、四類甲の版本「後鳥羽院御百首抄」、および四類乙の続群書類従本（卷三百八十六）の三種である<sup>2)</sup>。いずれの古注も奥書や識語を持たず、成立年や加注者などは未詳である。

従来、三類の中で古注を持つ伝本は前掲の貞清親王筆の書陵部本（雑一首を欠く）しか知られていなかった。しかし、鶴見大学図書館にも一本が所蔵されており（以下「鶴見大学本」）、こちらは欠脱のない完本である。もちろん、鶴見大学本の誤写と思われる箇所もあるが、書陵部本を相対化する伝本として重要である。また、和歌の配列が部分的に異なる点も注意される。本稿では鶴見大学本の全文を翻刻し、書陵部本との関係について簡単に検討する。

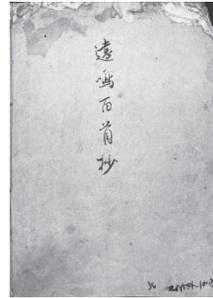
【表紙】



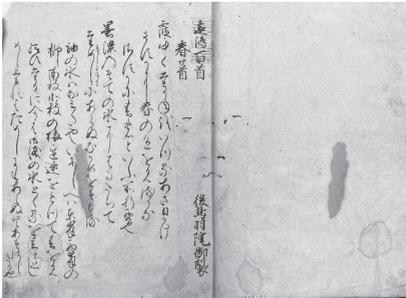
【前遊紙表】



【最終丁裏】



【二丁表】



【蔵書印】



【蔵書印（上下反転させたもの）】



一、鶴見大学本の書誌

鶴見大学本の書誌は次のとおりである。

登録番号…一三四四六七一。袋綴一冊。(江戸中期)写。表紙は前表紙のみ現存。縹色卍字繫地牡丹唐草文様型押表紙(表面の縹色の紙はほとんど剥がれた状態)。縦二七・三糎×横二〇・一糎。外題、表紙左肩に「遠鳴百首抄」、表紙右下にも「遠鳴集」と本文別筆で打付書。また、最終丁裏中央に「遠鳴百首抄」(表紙外題と同筆。本文とは別筆)。内題、いずれも本文同筆で前遊紙表左肩に「遠鳴百首抄」、本文冒頭に「遠鳴百首 後鳥羽院御製」。本文料紙、楮紙(打紙)。二八丁(うち前遊紙一丁)。每半葉一一行。和歌一首三行書き(上句末で改行し、一字下げで下句を書き始める)。注は二字下げ。字高、和歌は約一九・四糎、注は約二〇・五糎。蔵書印、一丁表右上に内題の「遠鳴百」の文字と重なる形で、また上下逆さまに捺される。印記の一字目は「芳」か(石澤一志氏のご教示による。画像参照)。縦四・〇糎×横二・三糎、朱、陽刻、单枠。後藤重郎氏旧蔵。なお、表紙と前遊紙表の右下には外題と同筆で「黒田」の署名あり。

一オ〜二ニウに『遠島百首』。二三オ〜同ウに四首の付載歌。これは徳島県立図書館蔵森文庫本(W九一一・一ノコト)などにも見える。二四オ〜二六オに「御所の長哥」、二六ウ〜二七オに七首の付載歌。これらはいずれも他出が見出せない。後鳥羽院の真作か否かも含め、今後、考察すべきであろう。なお、付載歌も含め、本文は一筆である。

## 二、書陵部本の脱落歌

書陵部本では雑部の八四番歌とその注が次のようになっていた。<sup>4</sup>（傍線は私意。以下同）。

夕月夜入江にしほやみちぬらん  
芦のうきはの田鶴のもろこゑ

ちどりのなくをさ夜更がたにきかんとおぼしめしければ、

磯の松風にまがひて、さだかにもなし。衛のおほくさ

だかにきこゆべきを、独やきつる、松風にまよふと也。

これは和歌と注の内容が合致しておらず、転写の過程で八五番歌が脱落したと想定されていた。<sup>5</sup> 実際、鶴見大学本では次のようになっていた。

夕月よ入江にしほやみちぬらん

あしのうき葉のたづのもろ声

おきのうみひとりやきつるさ夜千鳥

鳴音にまがふ磯の松風

千鳥のなくをよふけがたにきかんとおぼし

めしければ、いその松風にまがひてさだかに

なし。千鳥おゝくさだかにきこえ、なをひ

とりやきつる、松風にまがふとなり。

これにより、書陵部本の脱落と確定できる。しかし、傍線部は書陵部本の本文が良いであろう。鶴見大学本では、

千鳥の声を「定かになし」と述べた直後に「定かに聞こえ」と続ける点、また「千鳥多く」と述べながら「独りや来つる」と続ける点が不審である。強いて解釈すれば、「千鳥の声が松風の音に紛れ、はつきりしない。(しかし)千鳥の声は多くはつきりと聞こえ、やはり「千鳥だけが来たのか、または松風の音に紛れているのか」と詠んだ」となるうか。すなわち、作中主体の耳に聞こえてくるのは千鳥の声そのものなのか、それに似た松風の音なのか、判断に迷っているという説明と捉えるのである。しかし、やはり分かりにくい文脈であろう。

一方、書陵部本の「聞こゆべき」ならば、和歌では一般的に千鳥が群集して鳴く様子を多く詠むので、それを前提に「千鳥の声が松風の音に紛れ、はつきりしない。(本来ならば)千鳥の声は多くはつきりと聞こえるはずであるのを、「千鳥が一羽で来たのか、または松風の音に紛れているのか」と詠んだ」といった意味になろう。千鳥の声がはつきりしないのは千鳥が「ひとり」であるからか、または松風の音に紛れているからかと怪しんだという解釈で、鶴見大学本より分かりやすい。ほかの注意すべき異同については後述する。

### 三、鶴見大学本の配列

鶴見大学本と書陵部本では雑歌の配列が異なっている。三類の伝本は次のように分類される。

〔有注の三類本〕

・ 鶴見大学本

・ 書陵部本(前述)

〔無注の三類本〕

鶴見大学図書館蔵『遠嶋百首抄』翻刻・校異

- ①上田市図書館花月文庫蔵「後鳥羽院遠嶋百首」(和歌・六八)  
 ②宮内庁書陵部蔵「後鳥羽院御製」(B七・三二)  
 ③無窮会図書館神習文庫蔵「後鳥羽院御製」(一〇一三八・井)  
 ④島根大学図書館蔵「後鳥羽院御製百首」(1396504) 島根県師範学校郷土室旧蔵。  
 ⑤水無瀬神宮本(『水無瀬神宮文書』所収)

⑥早稲田大学図書館蔵「後鳥羽院遠嶋百首御哥」(イ04 00696 212)

したがって、まずはこの八本の配列を比較すべきであろう。ただし、③～⑤は②と同じ奥書を持つ「同一系統本」なので、ここでは①②⑥を取り上げる(次ページの表参照。鶴見大学本の雑歌の初句(初句が同じ場合は二句の数文字)を掲げ、他本の配列が異なる部分のみを同様に記す)。結局、鶴見大学本と書陵部本は「うしとだに」歌の位置を異にするのみである。三類の中では書陵部本の「うしとだに」歌の位置がやや特殊と言えよう。

なお、①②⑥巻軸の「かぎりあれば」歌は三類の有注本では秋部に入れられている。また、②の「おきわびぬ」歌は他本の「なまじひに」歌に対応する改作歌であるが、「おきわびぬ」の句は一類本の本文と合致する。つまり、②は部分的に一類本の本文を持つことになる。さらに、①⑥は雑部の配列がまったく同じであるが、百首全体を比較すると、⑥の本文は②に近い一方、五類の特有歌をも有する点で「混態的性格の強い」本と指摘される。このように、『遠島百首』の配列や本文は複雑な関係にあり、三類以外の諸本との比較も必要となる。

ここで、同じく有注本を含む四類を比較する。四類は甲乙に細分され、甲本には版本、大阪大学国文学研究室本<sup>9)</sup>、乙本には続群書類従本・蓬左文庫本・三手文庫本などが属す<sup>10)</sup>。比較すると、四類の配列は三類の無注本に近いことが分かる。雑の後半部は四類乙本がやや三類の有注本に近いが、やはりここでも「うしとだに」歌の位置が異なり、

また「かぎりあれば」歌が秋部でなく雑部に含まれる点も異なっている。これらに比べれば、有注本を含む三・四類全体の中では、鶴見大本と書陵部本の配列上の相違はほとんどないと言ってよからう。

【鶴見大本】 【書陵部 有注】 ①花月・⑥早大 【②書陵部 無注】 【四類甲】 【四類乙】  
いにしへの

とへかしな雲

なまじひに

おきわびぬ

なまじひに

なまじひに

なまじひに

とへかしな雲

とへかしな雲

とへかしな雲

とへかしな雲

藻塩やく

かもめなく  
藻塩やく

かもめなく

波間わけ

潮風に

里遠み

長き夜を

とはるるも

とはるるも

とはるるも

とはるるも

とはるるも

長き夜を

長き夜を

長き夜を

長き夜を

暁の

とにかくにつらき

過ぎにける

夕月夜

おきの海

(脱落)

日にそへて

何となき

人心

よそふべき

晴れやらぬ

みほの海を

うしとだに

我こそは

思ふこと

ことづてん

とにかくに人

ふるさとの

同じ世に

なびかずは

とへかしな大宮

みほのうらの

よそふべき

晴れやらぬ

うしとだに

ことづてん

とにかくに人

ふるさとの

思ふ人

我こそは

みほのうらの

たとふべき

晴れやらぬ

うしとだに

ことづてん

とにかくに人

ふるさとの

思ふ人

我こそは

みほのうらを

よそふべき

晴れやらぬ

うしとだに

ことづてん

とにかくに人

思ふ人

ふるさとに

我こそは

かぎりあれば  
かぎりあれば

同じ世に

なびかずは

とへかしな大宮

我こそは

思ふ人

ことづてん

うしとだに

とにかくに人

ふるさとの

同じ世に

なびかずは

※四類甲は雑歌が三十一首ある。

#### 四、鶴見大学本の異本注記

鶴見大学本を書陵部本と比較したときに目立つ、もう一つの特徴は異本注記の多さである。書陵部本の異本注記は数箇所に限られるが、鶴見大学本には和歌を中心に多くの異本注記がある。一覧すると次のとおりである。まず、鶴見大学本の本文を示し、異本注記のある箇所が書陵部本ではどのようなようになっていくかを示す。※印には書陵部本と一致しない本文または異本注記が『遠鳥百首』のどの系統の本文と合致するかを記す。前述のとおり、『遠鳥百首』の本文は複雑で、同系統内においてすら異同がある場合も少なくない。ここでは大まかな目安として『古典文庫』所収の「一類・二類・四類甲本、『統群書類従』（四類乙）、また二類に分類されるものの、『古典文庫』底本の国立歴史民俗博物館本とはやや距離のある冷泉家時雨亭文庫本（『冷泉家時雨亭叢書29中世私家集5』の影印、およびその転写本である書陵部本（一五〇・三三〇）参照。以下「時雨亭本」、また五類の京都大学附属図書館蔵「七家歌集」所収「後鳥羽院遠嶋御百首」（423・シ・18）の本文を参照した。このいずれとも一致しない場合は「ナシ」と記す。

#### A、鶴見大学本の本文が書陵部本と一致する例

- 5 里人のすそ野、ゆきをふみわけてた、我ためにわかなつむころ  
に―に ※「と」は一・二・四類甲・五類。四類乙「に」。時雨亭本、当該歌ナシ。
- 11 浦山しななき日影の春もあひていせをのあまも袖やほすらん  
あまも―海士も ※「の」は一類の一部伝本。

- 13 おのれのみ春あへる春にもとイにあふかとおもふにもみねのさくらの色そのうき  
春あへる春にもとイにあふかと―春にあふかと
- 14 ※「あへる春にもと」ナシ。時雨亭本「あふかはるにはと」。五類「春あふ春にもとイにあふかと」。一類は改作。  
春雨ちゆに花はなのとたへそ袖そでにもるさくらつし、きの山やまの下みち  
に― ※「も」は一・二・四類甲乙・五類、時雨亭本。  
つし、き―つし、き ※「し」はナシ。
- 15 なかむれは月つきやは有あし月つきやあらぬなうき身みそもとの春はるにかはれる  
月つきやあらぬ―月つきやあらぬ ※「ならぬ」は一・二・五類、時雨亭本。四類甲「ならぬ」、四類乙「はあらぬ」。
- 17 宿しゆくからむかたの、みの、かりころも日も夕ゆふくれのはなはなの下したかけ  
はなはなの下したかけ―花はなした陰かげ
- 20 ※「せ」は二類。四類甲は「夕風」。時雨亭本「ゆふかけ」。五類、五句「み花ねの夕影らしに」  
物ものおもひに過する月つき日はしらねとも春はるやくれぬなときしのやま吹ふ  
おもひ―おもひ ※「ふ」は一・二・四類甲乙・五類。
- 26 いまはとてそむきはてつる世よの中なかになにととかたろふ山やまほと、きす  
くれぬなときしのやま吹ふ―暮くれぬる岸しづの山吹やまぶき ※「みね」は一類。二類「山なふみき」。時雨亭本「藤ふなみ」。  
つる―つる ※「てし」は二類・時雨亭本。一類は「てき」または「にき」。四類乙・五類「ぬる」。
- 29 なにはえやあまのたくなはもえたわひて煙けむもしめる五月ご雨うのころ  
もえ―もえ ※「たき」は二類・時雨亭本。一類は「焼」。四類乙「焼もえ」。

- 30 したくゆるむかひの森（開イ）の蚊遣火に思ひもえそひ行はたるかな  
 森（開イ）—森 ※「岡」は五類。
- 38 秋されはいと、おもひのましはかるこのさと人も袖（ヤイ）の露けき  
 の（ケイ）の ※「を」は二・四類甲乙・五類、時雨亭本。一類「も」。  
 の（ヤイ）の ※「や」は一・二・四類甲乙・五類、時雨亭本。
- 40 故郷をわかれちにおふるくす（葛イ）のはの風はふけともかへる世もなし  
 くす（葛イ）—葛 ※「葛」は一類の一部伝本。
- 42 いかにせんくす（葛イ）はふ松のときのまもうらみてふかぬ秋風そなき  
 くす（葛イ）—くす ※「葛」は一類の一部伝本。
- 44 なきまさるわか涙にや色（まさイ）かはる物おもふやとの庭のむら萩  
 かはる（まさイ）—かはる ※「まさ」ナシ。
- 46 故里の一むらす、きいかはかりしけきのはらとむし（のイ）もなく（らんイ）なり  
 むし（のイ）—虫も ※「の」は一・二・四類甲乙・五類。
- 47 野へそむるかりの涙はいろもなしものおもふ露（おイ）のはき（おイ）のさとには  
 はき（おイ）の—萩（おほきイ）の ※「お」は一・二・四類甲乙、時雨亭本。
- 49 はれよかしうき名（も）をわれにわきもこかかつらき山の峯のあさきり  
 を（も）—を ※「も」ナシ。

- 50 思野への木間にみゆるまきの戸にたえくかゝるくすの秋かせ  
つたイ  
 くす—葛
- 51 ※「つた」は一・二・四類甲、時雨亭本。一類の書陵部本「葛」。葛イ四類乙、当該歌ナシ。五類「葛」。くすイ
- 52 おなしくは霧のおち葉もふりしけははるふ人なき秋のまかきに  
のイ ※二類「も」。時雨亭本、当該句ナシ。五類「の」。
- 53 も—も ※二類「も」。時雨亭本、当該句ナシ。五類「の」。
- 54 ぬれてほす山ちの菊もあるものをこけの袂はかわくまもなし  
そイ もなし—もなし ※一・二・四類甲乙「そなき」。五類「もなき」。
- 55 ふゆくれば庭のよもきかしたもえてかれはのうへに月そさへ行  
はれイ もえ—もえ ※「はれ」は二類・時雨亭本。一類「はれ」。五類「おれ」
- 56 しもかれのお花ふみわけ行鹿の声こそきかねあとは見えけり  
はイ の—の ※「は」は二・四類乙。
- 57 おのつからとふかほなりし萩のはもかれくにく風はけしきイのさむけき  
はきイ 萩—萩 ※「はき」ナシ。
- 58 こそよりはもイにはもイのもみちのふかきかななみたやいと、しくれそふらむ  
もイ は—は ※「も」は二・四類乙・五類、時雨亭本。一類「よそよりも」。
- 59 ちりしける錦はこれもイもけふはたえぬへしもみちふみわけかへる山人  
はイ もけふは—もけふは ※「はこれも」は一・四類甲乙・五類、時雨亭本。二類「なかめはこれも」。
- 60 冬りイこもるさひしさおもふあさなくつまきのみちをうつむ白雪

65

る―る ※「り」は四類甲乙・五類、時雨亭本。二類の初句「冬〔空白〕」。

66 山風のつもればやかて吹たて、ふれとたまらぬ峯の白雪

ふれとたまらぬ―ふれとたまらぬ ※「りもと」ナシ。

67 さなからやほとけの花におらせまししきみの枝につもるしら雪

つもる―つもる ※「ふれ」ナシ。

68 けさ見れば仏のあかにつむ花のいつれ成らむ雪のむもれ木

の―の ※「も」は一・四類乙、時雨亭本。二類「の」。四類甲、当該歌ナシ。五類「も」。

70 かそふれはことしのくればしらるれと雪かくほとどのいとなみもなし

ことしのくれば―今年の暮は

※「としのくる、は」は二類。一類「としの暮そと」。時雨亭本「としのくれとは」。五類「ことしの暮は」。

72 とへかきな雲のうへよりこしかりのひとりともなきうらみなくねを

うらみ―恨 ※「に」は一・二・四類甲、時雨亭本。五類「うらみ」。

75 かもめなく入江にしほはみつなへにあしのうき葉をあらふ白波

に―に ※「の」は一類の一部伝本・四類甲乙・五類、時雨亭本。

76 波まわけおきのみなとに入舟のわれそこかる、たえぬおもひに

波まわけ―浪ま分 ※「わけて」ナシ。一類「波路わけ」、二類「波間より」。

- 78 さととをみきねかかくらのこゑすみておのれもふくるまとのともし火  
とをみ―遠み ※「き」は二類の一部伝本。一類「遠く」。  
ふくる―ふくる ※「おわる」ナシ。
- 80 とわる、もうれしくもなき此うみをわたらぬ人のなけのなさは  
なき―なき ※「し」は二・四類甲乙・五類、時雨亭本。一類は当該歌ナシ。
- 82 とにかくにつらきはおきのしまつ鳥うきをはおのか名にやこたへん  
おのか―おのか ※「なれ」は二・四類甲乙・五類、時雨亭本「たれ」。
- 83 すきにける年月さへそうらめしき今しもかゝるものおもふ身は  
身は―身は ※二類「ことは」。四類乙「とは」。
- 89 よそふへきむろのやしまも遠ければおもひのけふりいか、まかへむ  
も―も ※「の」は四類甲。
- 90 はれやらぬ身のうき雲をいとふまに我世の月の影そふけぬる  
そ―そ ※「や」は二類、時雨亭本。五類「そ」。
- 96 とにかくに人のこゝろはみえはてぬうきや野守の鏡なるらん  
は―は ※「も」は一・二・四類乙・五類、時雨亭本。四類甲「の」。
- 99 なひかすはまたやはかみにたのむへきおもへはかなしわかのうらなみ  
たのむ―頼む ※「たむく」は二・四類甲乙・五類、時雨亭本。一類「手向なん」

100 とへかしな大宮人の情あらはさすかに玉の緒たへせぬ身を

情―情 ※「心」ナシ。一・四類乙・五類は当該歌ナシ。

B、鶴見大学の異本注記が書陵部本と一致する例

2 墨染のそでの氷にはるたちてためしにあらぬなかめをそする

ためしに―ありしにも ※「ためし」ナシ。

6 ふる雪に野もりかいほもうつもれはわかなつまんとたれにとはまし

うつもれは―あれはて、 ※五類「うつもれて」。時雨亭本、当該歌ナシ。

8 春雨に山たのくろを行しつのみのふきみたす風そさひしき

風―暮くれ「暮」は「風」を擦り消して上書き ※「風」ナシ。時雨亭本、当該歌ナシ。

22 故郷をしのふの軒のかせすきて苔の袂にほふたちはな

の―に ※「の」ナシ。四類乙「は」。

25 あやめふくかやか軒はに風すきてしとろにをつる村雨のをと

をと―露 ※「をと」ナシ。

27 五月雨に池のみきはや増るらんはすのうきはをこゆるしら波

みきは―みかさ ※「みきは」は一・二・四類甲乙。

28 五月雨に宮木も今はくたすらんまつたつみねにかゝる村雲

今は―今や ※「は」ナシ。時雨亭本・五類、当該歌ナシ。

- 41 さきかゝる山した紅葉みちもまかふまでたまぬきみたす萩あきのあさ露  
 紅葉みちも―道も ※「紅葉」ナシ。
- 46 故里の一むらす、きいかはかりしけきのはらとむしのいもなくらんいなり  
 みたす―みたる ※「みたす」ナシ。  
 なくなり―啼らんいらん ※「なくなり」ナシ。一類「鳴声」。時雨亭本「わふらむ」。
- 51 おなしくは霧のおち葉のいもふりしけなははるふ人なき秋のまかきに  
 は―な  
 ※「は」ナシ。一類「しきな」・「しくな」・「しくか」、二類「れな」、四類「よ」。時雨亭本、当該句ナシ。
- 55 夜もすからなくやあさちのきりくすはかなくくなる、秋をうらみて  
 なる、―暮る ※「なる、」ナシ。
- 56 みしよにもあらぬたとを哀とやをのれしをれてとふしくれいあらしかな  
 あらし―しくれい ※「あらし」ナシ。
- 69 おく山のふす猪のどこやあれぬらんかるも、たえぬ雪のむしるしれ木  
 むしるしれ木―しるしは  
 ※一・二類「しるしに」。四類甲、当該歌ナシ。四類乙「隣印いは」。時雨亭本「したしは」。
- 71 いにしへの契りもむなしすみよしやいをわかたそきのかみとたのめと  
 を―や ※「を」ナシ。

73 なましひにいければうれし露の命あらはあふせをまつとなければ

なければ―なけれど ※「は」ナシ。一類は改作で「なき身を」。

75 かもめなく入江にしほはみつなへにあしのうき葉をあらふ白波

あらふ―こゆる ※「あらふ」は一類(京大本)・二・四類甲乙、時雨亭本。一類の歴博本は当該歌ナシ。

92 うしとたに岩波たかしよしのかはよしや世の中おもひすつへき

たかし―高き ※「し」ナシ。時雨亭本「たかく」。

すつへき―捨てき ※「すつへき」ナシ。

95 ことつてんみやこまでもしさをはれてあなしの風にまかふ村雲

て―は ※「て」ナシ。一類は改作で、当該句ナシ。

### C、鶴見大学本の本文も異本注記も書陵部本と一致しない例

11 浦山しななき日影の春もあひていせをのあまも袖やほすらん

春もあひて―春にあひて ※一・二・四類甲乙・五類、時雨亭本「春に逢て」。

59 おのつからとふかほなりし荻のはもかれくにく風のみさむけき

さむけき―さむけき

※一・二・四類甲・五類「さむけき」。四類乙「はけしき」。時雨亭本、五句「あきそさひしき」。

73 なましひにいければうれし露の命あらはあふせをまつとなければ

あふせ―あふ世

※「うきせ」ナシ。二類・時雨亭本「あふせ」。四類甲乙・五類「あふ世」。一類は改作で「逢世」（一部伝本「あふせ」）。

用例数は次のようになる。

- A、鶴見大学本の本行本文が書陵部本と一致する例 46  
 B、鶴見大学本の異本注記が書陵部本と一致する例 20  
 C、鶴見大学本の本行本文も異本注記も書陵部本と一致しない例 3

Cは鶴見大学本の本行本文の誤写である可能性も高く、大まかに言えばAに含めて良いかもしれない。書陵部本の本文はAのように鶴見大学本の本行本文と一致する場合も多いが、Bのように異本注記の方と一致する例も少なくない。やはり、ここでも本文の関係を明確に分類・整理しきたい。

Aは鶴見大学本の本行本文が書陵部本と一致する例であるが、鶴見大学本の異本注記の方はどの伝本と合致するか。次のように整理できる。

- 一類 19 二類 25 時雨亭本 19 四類甲 17 四類乙 16 五類 16 どれとも一致しない 10

もつとも、各系統を代表する伝本のみとの比較であるうえ、系統ごとに歌の差替えもあるため、単純な比較はできない。したがって、二類との一致数がやや多い点も誤差の範囲内と言えるかもしれない。しかし、特定の系統との一致率が格段に高いわけではないということは指摘できよう。

また、Bも同様に整理すると次のようになる。

- 一類 3 二類 3 時雨亭本 1 四類甲 2 四類乙 2 五類 1 どれとも一致しない 16

こちらは差が歴然としていようか。Bは鶴見大学本の異本注記が書陵部本の本文と一致する例なので、その場合の鶴見大学本の本行本文は通行の本文と一致しないことが多いという結果である。もちろん、鶴見大学本独自の誤写の可能性や、『遠島百首』諸本をさらに比較することで、同じ本文をもつ伝本が見付かる可能性などもあるが、鶴見大学本の一つの特徴として注目すべき点であろう。

##### 五、鶴見大学本の本文の特徴

鶴見大学本の和歌は百首が完存し、異本注記も多いという特徴を持つ一方、注の部分には瑕も少なくない。たとえば、三、三四、三九番歌のごとく、鶴見大学本の脱文と思われる箇所も散見する。しかしながら、鶴見大学本の方が書陵部本より文意が通りやすい場合もある。たとえば、春部の十三番歌は鶴見大学本では次のとおりである。

おのれのみ春あへる春にもとイにあふかとおもふにも

みねのさくらの色ぞものうき

本哥に「梅はとびさくらはかる、世の中になにとて

松のつれなかるらん」。此御系ちかひかにはれて、松もと

びたる事有。草木だにも昔相丞の御流罪をば

あはれみあるに、さくらひとり春にあひがほ成

事をねたみたまひて、「嶺のさくらのいろぞもの

うき」とあそばしたるなり。

傍線部は書陵部本「はじめて」とする。その場合、「道真の詠歌で、初めて松も飛んだ」という意になる。これでも通意ではあるが、「(松のつれなさをなじった)道真の詠歌に恥じて、松も飛んだ」とする鶴見大学本の注記にも留意されよう。

また、冬部の六七番歌は次のとおりである。

さながらやほとけの花におらせまし

しきみの枝につもるしら雪ふれい

「ほとけの花」とはさくらにかぎるべし。本哥に

「ほとけにはさくらはなをたてまつれわがのち

のよを人とぶらはゞ」とよめる。春くれば、ね

はんにあへるものなれば、「仏のはな」ともちひ

たり。しきびのゑだに雪のつもりたるは

さながら「ほとけのはな」におらせましとや。

書陵部本は第五句「つもる白雪」、傍線部「桜は」とする。「桜は涅槃にあへる」というのはや唐突であろう。「春が来れば、涅槃の日にめぐりあうので、「仏の花」には(春に咲く)桜を用いる」という鶴見大学本の説明の方が解しやすい。

雑部の七四番歌も同様である。

もしほやくあまのたくなはうちはへてくるしとだにもゆふかたぞなき

「うちはへて」とはわざとなり。「あまのたく

なは」と、あまのうけなはをおきにてうちは  
へて、いそにてそのなはをたぐるなり。我おもひ  
の色をわざととふ人はなくて、つかひなどの  
おとづれをうらめしく、さてこそ「うちはへて  
くるしとだにもいふかたぞなき」とあそ  
ばしたれ。

書陵部本は傍線部「と」を「とは」、「なはをおきにて」を「なは奥に」とする。前者は書陵部本の方が自然であろうが、後者は「いそにて」との対応関係からも「おきにて」が良いであろう。

おわりに

以上、鶴見大学本について簡単に検討した。『遠島百首』の古注は田村氏が三類・四類甲・四類乙の三種類に大別できると指摘して以来、ほとんど研究対象とされてこなかった。鶴見大学本は従来、孤本とされてきた書陵部本と互いに補完しあう関係にあり、三類の古注を研究する際には両本を参照する必要がある。う。

三種類の古注の読解をはじめ、それぞれの古注の関係性、および『遠島百首』諸本の中の位置付け、あるいは『遠島百首』付載歌などに関する考察が今後の課題となる。

- 1 田村柳壺『遠鳥百首』の伝本と成立―作品改訂の問題を中心として―(『後鳥羽院とその周辺』笠間書院、一九九八年。初出一九八三年五・六月) 参照。
- 2 書陵部本と版本は井上宗雄・田村柳壺『中世百首歌二』(古典文庫、一九八三年)に全文が翻刻される。
- 3 田村柳壺「後鳥羽院の作品拾遺」(前掲『後鳥羽院とその周辺』。初出一九九七年十二月) 参照。
- 4 引用は日本古典籍総合目録データベースの画像により、私に濁点と句読点を付す。以下同。
- 5 注2前掲書、解題「五 遠嶋百首(第三類本。付注本)」参照。
- 6 注1前掲論文参照。
- 7 注1前掲論文参照。
- 8 注1前掲論文参照。
- 9 山本一・佐藤明浩「大阪大学文学部国文学研究室蔵後鳥羽院御集(翻刻) 三」(語文〈大阪大学〉47、一九八六年四月) 参照。
- 10 注1前掲論文参照。四類甲乙の伝本のうち、四類甲の伊達文庫蔵「代々集巻頭和歌」所収「隠岐院御百首和歌」(911.201/47)のみ、配列が大きく異なり、表中のどれとも合致しない。
- 11 続群書類従(宮内庁書陵部本〈四五三・二〉)は日本古典籍総合目録データベースの画像、京都大学附属図書館蔵「七家歌集」は紙焼き写真参照。

【凡例】

一、底本は鶴見大学図書館蔵「遠嶋百首」（登録番号…一三四四六七二）である。  
一、可能な限り底本に忠実に翻刻したが、次の処置を施した。

・私に歌番号を付す。  
・ミセケチは―によって示す。

・朱の文字はその文字の下に（朱）と注記する。

・私に付した注記は（―）に括り、本文と区別する。

・丁の変わり目には「（一オ）のように丁数と表裏の別を記す。

一、翻刻の下段に、宮内庁書陵部蔵本（伏・一八八）の異文を掲げた。

・まず鶴見大学の本文を掲出し、対応する書陵部本の異文を掲げる。

・原則として表記の相違は採らないが、文意に関わる場合は掲出する。

・異文や注記が長くなる場合は脚注に記す。

一、鶴見大学本と同じ付載歌を持つのは次の諸本である。

徳島県立図書館森文庫蔵「遠嶋百首和歌」(W911.1/コト)【森】

肥前島原松平文庫蔵「哥書集 雅」(一一九・六)【松】

宮内庁書陵部蔵「片玉集」(四五八・二)【書】

付載歌についてはこの三本の異文を【】内の略号により示す。いずれも日本古典籍総合目録データベース参照。

【翻刻】

遠嶋百首

後鳥羽院御製

春廿首

1 霞ゆくたかねをいつるあさ日かけ

さすかに春の色を見るかな

さすかに春のといふ所肝要也

2 墨染のそでの氷にはるたちて

袖の氷はなみた也いにしへは東岸西岸の  
給ひたるに今は御涙の氷とくるを春と思し

柳南枝北枝の梅遅速をもつて春を見

めしければためしにもあらぬとあそはしたる也」(1オ)

3 も、千鳥さへつる空はかわらぬと

わか身の春にあらたまりぬる

も、千鳥鶯の事なりあらたまるはあた

らしくなる也

【校異】

後鳥羽院御製―後鳥羽院

有しにもイ  
ためしに―ありしにも

氷―氷の

ためし―ありし

春に―春そ

も、千鳥―百ちとりは

也―なり遠嶋なればなり

4 とけにけり紅葉をとちし山かはの

又水くゝる春のくれなひ

紅葉の紅は山川にとちられてあるといへ

ともあらは又うちとけてなかれは〔巻〕いつれは

ふたゝひこそその紅葉になる也御しんたひに

御たのみのなけれはうらやましくおほしめし

てまたくる春の紅とあそはしたり〔1ウ〕

5 里人のすそ野、ゆきをふみわけて

たゝ我ためにわかなとイつむころ

本哥に君かためわかなつむといへともそれは

いにしへの事也今はすその、雪をふみておそ

るゝをなけれは君かためとつますしてたゝ

我ためとあそはしたる也

6 ふる雪に野もりかいほもあれはて、イうつもれは

わかなつまんとたれにとはまし

ある―あり

あらははる春―春は なかれは〔巻〕―なかれ

紅葉に―紅に

たのみの―たのみ・

くる―水くゝる

に―とイ

本哥に―本哥には

ふみて―ふみ分て

おそるゝを―おそるゝ儀

とあそはしたる也―となり

うつもれはあれはて、イ―あれはてゝ

<sup>1</sup> 傍記「はる」のみ朱。

<sup>2</sup> 「は」の字の中央に付されたミセケチ記号（○）のみ朱。

野もりとは御せつともものふきやう也正月七日  
 のわかな三月三日のは、こたむこたのよもきあやめ

七夕のそりの花九日の菊にもの、ものを進す」(2才)  
 る也御よのすたる、を見て野もりか庵もあれ

はへるとあそはしたる也

7 ねせりつむ野沢の水のうすこほり

またうちとけぬ春風そふく

8 春雨に山たのくろを行しつのみ

みのふきみたす風くれいそさひしき

景気の御哥也

9 かきりあれはかきねの草も春にあひぬ

つれなき物は苔ふかきそて

かくる、きなし

10 遠山路いくゑも霞めさらすとて」(2ウ)

おちかた人のとふもなければ

おちかた人はむかふ人也古今におちかた人

にも申といふ事おなし事也しかればちかき

人なりむかしおそれつる人まへわたりしてと

御せつとももの御節供の

たむこたの一端午の

はへる―はつる

風くれい―暮風イ「暮」は「風」を擦り消して上書き」

御哥―哥

おちかた人は―をちかた人とは

をる程に影を見ればむかしかたりもおもひいてら  
るゝなりしかれはいくゑもかすめとは御述懐の御心也

11

浦山しなかき日影の春もあひてにあひぬい

いせをのあまも袖やほすらんのい

伊勢のあまは日に七十五度うみに入なればたも

とのかはくまもなしされとも春のなかき日を

まちうけてたもとをほすなり御たもと」(3才)

はなかきにもかかはかねはいせほのあまをうらや

ましきなり

12

もへ出る峯のさわらひゆき消て

おりすきにける春そしらるゝ

おもてのことし

13

おのれのみ春にあふかとおもふにもあへる春にもとイ

みねのさくらの色そのうき

本哥に梅はとひさくらはかるゝ世の中になにとて

松のつれなかるらん此御ゑひかにはれて松もとちか

春もあひて―春にあひてにあひぬい

あまも―海士ものい

伊勢の―いせおの

なかき日―永日

なかき―永日

ける―けりるイ

ける―けりるイ

春にあふかと―春にあふかとあへる春にもとイ

はれて―はしめてちか

はれて―はしめてちか

ひたる事有草木たにも菅相丞の御流罪をは

あはれみあるにさくらひひとり春にあひかほ成」(3ウ)

事をねたみたまひて嶺のさくらのいろそのもの

うきとあそはしたるなり

14 春雨あめに花のとたへそ袖にもる

さくらつゝしきの山の下みち

景気のうたなり

15 なかむれは月やは有し月なやあらぬ

うき身そもの春にかはれる

本哥にはものおもふといへと我身ひとつはもとの

身といへはしんたひに相違なければ浦山しき

身そもとの春にかはれるとなり

16 なかむれはいとゝうらみもますけをふる」(4オ)

おかへの小田をかへす夕くれ

かならずあれたる田にはすけといふものをふる

なりしかりとはいへとも春は一たひかへさるゝこと有

菅相丞―〔注3〕

に―に

つゝしき―つゝき

うた―御哥

月なやあらぬ―月なやあらぬ

身そ―身そと

すけ―菅〔古典文庫、「薦」と読む〕

3 古典文庫は書陵部本の字を「夢相悲」と読む。

御みつからの御き、てはあるましければ岡辺の  
小田をかへすにつけてうらみもますけをふる  
あそはしたる也

17 宿からむかたの、みの、かりころも

日もたくれのはなの下かけ

かくる、きなし

18 墨染の袖もあやなくにほふかな

花吹みたす春の夕風」(4ウ)

おもてのま、なりあやなくむやう也

19 ちる花に瀬々の岩まやせかるらん

桜にいつる春のやまかは

落花のていなり

20 物おもひに過る月日はしらねとも

春やくれぬときしのやま吹

暮春のおりふし御はなみ也

夏十五首

21 けふとてや大宮ひとのかへつらむ

むかしかたりのなつころもかな

御き、て―御帰洛は「古典文庫、「洛」を  
「路」と読む」

はなの下かけ―花した陰

むやう―むやく

おもひ―おもひ

くれぬときしのやま吹―暮ぬる岸の山吹

はなみ―あはれみ

たいりにうす衣といふ衣かへあり此事を」(5オ)

遠嶋の御時おほしめし出て大宮人のかへつ

らむ浦山しくとなり

22 故郷をしのふの軒たのかせすきて

苔の袂たもとにほふたちはな

しのふとはしたひたる事のきや風過てとは

よはる事なりこけの袂は物おもふ袖なり

かゝるたもとをむかしの人のおとつるゝ事

なきに風のたよりをもつてこけのたもと

にほふたちはなとあそはしたる也

23 くれかゝる山田やまののさなへあめすきて

とりあへはずなく郭公かくらうかな」(5ウ)

おもてのことし

24 たをやめの袖うちほろふ村雨に

とるやさなへのうゑもならはず

たをやめとは天女などのうつくしき事也

禁中に正月十四日の夜御たうへといふ事かふさゝの

浦山しくうら山しき

のたに

にほふに・ほふ

きやに儀なり

あへはずる―あへす

はろふ―はらふ

うゑ―こゑ

禁中―内裏 かふさゝ、―かふさく

き也是は昔天女のわさをつくなり此まなひをれ朱

こそ御朱らんして今はさなへとるあさましきすかた

となりちきに御らんしてとるやさなへのうへも

ならはすととなり哥に

春暮はほしのくらゐに影見えて

空のはしにいつるたをやめ」(6オ)

25 あやめふくかやか軒はに風すきて

しとろにをつる村雨のをとつゆイ

おもてのことし

26 いまはとてそむきはてつる世の中にてしイ

なにとかたろふ山ほと、きす

そむくとはいとひはてつる事なり郭公は

不如帰となく程にりんゑのものとおほしめして

今は何とかあろふといへる也

27 五月雨に池のみきかさいはや増るらん

はすのうきはをこゆるしら波

なりれ朱―也4

御らんして―御覽しつるに とる―とるを

ちきに―直 うへ―こゑ

〔書陵部本、歌を改行せず〕

暮は―くれは

空は―雲井

をと―露つゆイ

つる―つるてしイ

かたろふ―かたらふ

つる―たる

かふろふ―かたらふ

みきかさいは―水かさ

<sup>4</sup> 「な」の字の中央に付されたミセケチ記号(○)と傍記「れ」が朱。

28 かくるゝきなし」(6ウ)  
五月雨に宮木も今はくたすらん

今は—今や

まつたつみねにかゝる村雲

松は風をもつ物なればよのつねの雲はか、  
らねとも五月雨の比は雲のかゝるなり宮

雲の—雲

きとはみ山の木なりみ山にむもれたる木な  
との五月雨の水になかれいつるなればさみたれ  
のつよくふるを御らんして宮木も今やくた

29 すらんとあそはしたる也  
なにはえやあまのたくなはもえわひて

もえ—もえ

煙もしめる五月雨のころ

あまのたくなはとは浦に朽たるなわの事なり」(7オ)  
あま人のひろいてたく也此たくなはもへわひて

ふすふるはこてあたりろふしとくもりてけふ  
りにうちしめるなり

こて—その ろふし—ろふく

30 したくゆるむかひの森の蚊遣火に思ひもえそひ行ほたるかな

〔注5〕 森—森

5 30〜32の和歌一行書き、底本のママ。

景氣のうた也

31 哀にもほのかにたゝく水鶏かな老のねさめのあかつきの空

ほのかにはかすかなる事也今ほのきゝたるは老の

ねさめなれはとくるなよはりたるにつけても

ねさめのいよゝ花なるとなり

32 夕たちのはれ行峯の雲まより入日すゝしきつゆの玉さゝ

景氣の哥なり」(7ウ)

33 ゆゝすゝみあしのはみたれよる波に

ほたるかすそふあまのいさり火

海辺の眺望なり

34 くれ竹の葉末かたよりふるあめに

あつさひまある水無月のころ

竹風似雨といふ事ありくれ竹の葉のさら

くゝとさはくは雨のふりくるに似しかれば

あつさひまあるといふなり

35 みるからにかたへすゝしきなつころも

日も夕暮の山となてしこ

かくるきなしかたへすゝしきとは秋漸」(8オ)

ほのきゝゝほのかに聞

くゐなゝ水鶏の

花なるゝあはれなり

哥―御哥

ゆゝゝ夕

といふ―云 葉―葉すゑ

似―似たり

あつさ―涼しきよりあつさ

かくるゝかくるゝ 秋―秋ちかきは

す、しきと也

秋二十首

36 かたしきの苔の衣のうすければ

あさけの風も袖にたまらず

かたしき衣とはおもひねのまろねなとしたる

衣也夏のあいたは衣のうすき事をもしらす

秋になりて風のたまらず身にしむ時苔の

衣うすきをしる也袖にたまらずといふ所に

秋のこゝろあるへし本哥に秋立ていくかも

あらぬに此ねぬるあさけの風のたもとす、

しも」(8ウ)

かたしき―かた敷の ねの―ねの時 など―なとに  
事をも―事も

ぬるあさけの―ぬる朝けの

37 よのつねの草葉の露にしほれつ、

物思ふ秋とたれかいひけむ

おもてのことし

38 秋されはいと、おもひのまははかる

このさと人も袖の露けき

秋されは秋なれはとなりまははかるとはいと、

おもひのますといふこゝろなり

の―の

の―の「露けき」、古典文庫「露けき」と読む」

39 おもひやれましはのとほそおしあけて

ひとりなかもむる秋のゆふへを

翠帳紅圍をこそおしあけて御覧するに

かゝる御すまひあそはしたる也」(9オ)

故郷をわかれちにおふるくすのはの

風はふけともかへる世もなし

本哥にわするなよわかれちにおふるくすの

はの秋かせふかは又かへりこんつらゆきの本

哥にはかくのことくつ、けられるなり我に

風はふけともかへる世もなしと御述懐なり

41 ささかゝる山した紅葉まかふまで

たまぬきみたす萩のあざ露

〔一行空白〕

ささかゝりたるやうなり御哥はあきらか

なり」(9ウ)

42 いかにせんくすはふ松のときのまも

うらみてふかぬ秋風そなき

寸のひまもなくうらみたる儀也

翠帳―翠張 御覧するに―御覧するか

御すまひ―御住居なれば真柴の戸ほそをし明てと

わかれちに―わかれ路 くす―葛

ふけとも―吹とも

かくのゝなり―如此付侍也

我に―われは

紅葉―道も

みたす―みたる

〔空白〕―山路のほそきに両方より萩の〔古

典文庫、〔両〕を〔南〕と読む〕

くす―葛

四九

43 思ひやれいと、涙もふるさとの

あれたる庭の秋のしら露

いと、といふところかんやう也

44 なきまさるわか涙にや色まぶさかはる

物おもふやとの庭のむら菫

かくる、儀なし

45 かきりあれはかやかまぶさのきはの月もみつ

しらぬは人のゆくすへのそら」(10才)

世間に定相なしといへはかやかまぶさのきはの月を

十善の御くらゐとして御覽せらるへきには

あらねともかきりあれは御らんすれば也

此ま、しつむへきかとおほしめしてしらぬは

人のゆくすへの空となり

46 故里の一むらす、きいかはかり

しけきのはらとむしものイなくらんイなり

本哥に君かこへし一むらす、き虫のねの

まぶさかはる—かはる

かとおほしめして—〔注6〕

むしものイなくらんイなり—虫も啼らん

こへし—うへし

<sup>6</sup> 書陵部本、「とおほしめせとも又出へきかと思食て」。

しけきのへともなりにけるかな是をとりて  
あそはしたる也

47 野へそむるかりの涙はいろもなし」(10ウ)

ものおもふ露のはきおイのさとはは

雁来紅といふ草雁のこゑを聞て紅になる

なりしかれは野へそむるかりの涙とあそ

はしたる也此露もわかれ紅の涙にくらふれ

は色もなしとあそはしたるなり

48 哀なりたかつらとてかはつかりの

ねさめのとくに涙そふらん

たかつらとてかとはたれかつらさとてかといふ

へき涙をおとすなりそいかつらさをかりの

おとつれにてわかねさめのとくに涙のそひたる

はたかつらさをきかする也」(11オ)

49 はれよかしうき名もをわれにわきもこか

かつらき山の峯のあさきり

わきもこかとはひさしくなれたることく

なりしかれはかつらきとつ、けられたり朝

おイはきの—おほき萩の

わかれ紅の涙—我紅涙

へき—儀也 　　そい—蘇武

を—を 　　わきもこか—わきも子・か

わきもこか—わきも子 　　ことく—女

きりのことくうきなをはれよかしといへる也

50 思野への木間にみゆるまきの戸に

たえくかゝるくすの秋かせ

人跡たえくなる景気の事也

51 おなしくは霧のおち葉もふりしけは

はろふ人なき秋のまかきに

是もおなしていなり」(11ウ)

52 ぬれてほす山ちの菊もあるものを

こけの袂はかわくまもなし

本哥にぬれてほす山ちの菊の露のまに

いかてか我は千世をふるらんといへりこれを

とりて

53 たのめこし人のこゝろはあきふけて

よもきかそまにうつらなくなり

かくる、儀なし

54 山もとのさとのしる人のうすもみち

しる人しるへ

いへる也いへり

思野一岡の

くす一葛

〔五一番歌一注7〕もも はな

はろふはらふ

もも

露の「露の」の「は」を「も」を擦り消して上書き

いへりいへる

7 書陵部本、五一番歌を改行せず、五〇番の注に続ける形で書写。

霧のきりの

よそにもおしきゆふあらしかな

さとのしるへあるとは山家などの人のおとつ」(12才)

る、は花紅葉のたよりなりしかれはある

しもなくさむところにうすもみちもちるを

見であるしの心おもひやりてよそにもお

しきゆふあらしかなとあそはしたる

55 夜もすからなくやあさちのきりくす

はかなくなる、秋をうらみて

かくる、儀なし

冬十五首

56 みしよにもあらぬたもとを哀とや

をのれしをれてとふあらしかな

別のしさいなし」(12ウ)

57 ふゆくれは庭のよもきかしたもえて

かれはのうへに月そさへ行

此ま、の御哥なり

しるへ―〔注8〕

たる―たるなり

なる、―暮る

あらし―時雨

別の―別に

よもきか―よもきも

もえ―もえ

8 底本、「しるへ」の「へ」は、「人」を擦り消して上書き。

鶴見大学図書館蔵『遠嶋百首抄』翻刻・校異

58 しもかれのお花ふみわけ行鹿の

の—の

声こそきかねあとは見えけり

かくる、儀なし

59 おのつからとふかほなりし荻のはも

荻—荻

かれくにく風のさむけき

さむけき—寒けさ

とふかほとはとひかをなり

60 神無月しくれとひわけ行かりの

つはさふきほす嶺のこからし」(13オ)

かくる、儀なし

61 こそよりはにはのもみちのふかきかな

は—は

なみたやいと、しくれそふらむ

紅葉のかすの吹きにあらす色のふかきこと

なりよそのもみちはしくれはかりや庭には

の紅葉は涙にしくれをくわへつるほとに

庭の紅葉のふかきかなとなり

62 あをむとてうらみし山もほともなく

もなく—過て

9 底本、「きに」の部分、それを書写した小紙片を貼付。

庭には—庵庭

またしもかれの風おろすなり

飛花落葉も一栄

63 立田山まかふ木葉のゆかりとて」(13ウ)

ゆふつけとりにこからしの風

本哥にたつた山ねくらのこの葉ちり

はて、夕つけとりのいろそのこれるこれ

をとりに庭鳥はこのはのゆかりとあそ

はしたる也

64 ちりしける錆もけふはたえぬへし

もみちふみわけかへる山人

ふるさとしきのみたのもしくおほし

めしつるにあまつさへこのにしきたへぬへし

となりいかんとなれはこのやま人のふみ分

て我にしきになすことよとあそはしたる也」(14オ)

65 冬こもるさひしさおもふあさなく

つまきのみちをうつむ白雪

一栄—一栄(マツ)一楽なり

もけふは—もけふは

ふるさと—〔注10〕のみ—のみを

にしき—にしきも  
やま人—山

る—る

10 書陵部本、「古郷へはにしきをきてかへるといふ本文あり然はもみちの」。

鶴見大学図書館蔵『遠嶋百首抄』翻刻・校異

66 御さひしきかんのみや  
山風のもれはやかて吹たて、

ふれとたまらぬ峯の白雪

おもてのことし

御さひしき—さひしき や—なり

ふれとたまらぬ—ふれとたまらぬ

67 さなからやほとけの花におらせまし

しきみの枝につもるしら雪

ほとけの花とはさくらにかきるへし本哥に

ほとけにはさくらはなをたてまつれわかの子

のよを人とふらは、とよめる春くれはね」(14ウ)

はんにあへるものなれは仏のはなともちひ

たりしきひのゑたに雪のつもりたるは

さなからほとけのはなにおらせましとや

68 けさ見れは仏のあかにつむ花の

いつれ成らむ雪のむもれ木

おもてのことし

69 おく山のふす猪のとこやあれぬらん

かるも、たえぬ雪のむもれ木

かるもかくは木の枝なとをとりあつめて猪し、

おらせ—おほせ とや—となり  
の—の

よめる春くれは—よめり桜は

つもる—つもる

むもれ木—しるしは

猪し、—猪

70 のふみ所を雪のふるへき所にこしらへる也  
かそふれはことしのくれはしらるれと<sup>としのくる、はい</sup> (15オ)

雪かくほとどのいとなみもなし

雪をかくは禁中にていろくうへ木にかゝり  
たるをはらはせらるゝなり遠嶋の御すまひ  
なれはゆきかくほとどのいとなみもなしと也

雑三十首

71 いにしへの契りもむなしすみよしを<sup>やイ</sup>

わかかたそきのかみとたのためと

すみよしの明神をかたそきと申也しかれは  
かの明神をひとへに御たのもしくおほしめし  
けるにかゝる御ありさまなれはちきりもむ

なしとや (15ウ)

72 とへかしな雲のうへよりこしかりの

ひとりともなきうらみ<sup>にイ</sup>なくねを

ひとりともなきとはなきともなきなり雲の

ふみ—ふす へき—へきへき

ことしのくれは—今年<sup>としのくる、はい</sup>の暮は

禁中—内裏 いろく—色々の

たる—たる雪

を—や<sup>やイ</sup>

ひとへに—偏 おほしめし—おほし

とや—となり

なき—なき<sup>くイ</sup> うらみ<sup>にイ</sup>—恨

とは—なり<sup>にイ</sup>—とはなき友もなきと也

<sup>11</sup> 底本、「はなきとも」の部分は、それを書写した小紙片を貼付。

うへ禁中のこと也

73 なましひにいければうれし露の命

あらはあふせをまつとなければ

御出身の儀なけれどもいければうれしとなり

なましひとはかすならねとも心也

74 もしほやくあまのたくなはうちはへて

くるしとたにもゆふかたそなき

うちはへてとはわさとなりあまのたく(16才)

なはとあまのうけなはをおきにてうちは

へていそにてそのなはをたくるなり我おもひ

の色をわさととふ人はなくてつかひなどの

おとつれをうらめしくさてこそうちはへて

くるしとたにもいふかたそなきとあそ

はしたれ

75 かもめなく入江にしほはみつなへに

あしのうき葉をあらふ白波

みつなへとはしをのまなり

76 波まわけおきのみなとに入舟の

禁中―内裏

あふせ―あふ世  
なければ―なけれと

ゆふ―いふ

なはと―なはとは  
なはをおきにて―なは奥に

わさと―態

に―に

あらふ―こゆる

まなり―満なり

波まわけ―浪ま分

われそこかるゝたえぬおもひに」(16ウ)

おもてのことし

77

しほ風にこゝろもいとゝみたれあしの

ほに出てなけととふ人もなし

ほに出てなけとはあらはれて

なくとなり

78

さととをみ<sup>き</sup>ねかかくらのこゑすみて

おのれもふ<sup>おわる</sup>くるまとのともし火

79

長きよをなかゝあかすともとてや

夕つけ鳥のこゑそまぢかき

おもてのことし

80

とわるゝもうれしくもなき<sup>し</sup>此うみを」(17オ)

わたらぬ人のなけのなさけは

なけのなさけはいつはりのなさけとかけり

みやこよりふみまいらせたりければ御返事

なり

81

あかつきの夢をはかなみまとろめは

いやはかなゝる松風そふく

鶴見大学図書館蔵『遠嶋百首抄』翻刻・校異

とをみ<sup>き</sup>—遠み  
おわる<sup>い</sup>—更る  
ふくる<sup>い</sup>—更る

なき<sup>し</sup>—なき

いやはかなはいよ／＼はかなきなりよひより  
 してうれいにしつめはまどろむ事なし

あけかたなどにおとろかさされて夢みつる

はかりなりさてこそいやはかなる松風(マツカゼ)なり

82 とにかくにつらきはおきのしまつ鳥(ツル) (17ウ)

うきをなれイはおのか名にやこたへん

しまつ鳥とは鶉ツルの事なり我名をうとは

へれは世上のうき事をなれか上こたへてうといふ

ほとにとにかくにつらきとあそにはしたり

なれはなんちといふき也

83 すきにける年月さへそうらめしき

今しもかゝるものおもふ身こころは

かくる、儀なし

84 夕月よ入江にしほやみちぬらん

<sup>12</sup> 書陵部本、「なり」の「り」を擦り消し、右に「り」、左に「し」と書写。古典文庫は「なりし」と読むが、「なり」

または「なし」の二つの本文を示すか。

<sup>13</sup> 書陵部本、改行し、八二番の注と同じ高さから歌を書く。

なとに―なとに少まどろむを松風に

はかりなり―〔注12〕 松風なり―松風となり

なれイ おのか―おのか

うと―うと〔二文字擦り消し〕うと〔と上書き〕

上―うへに

なれは―なれかは

〔八三番歌―注13〕

こころ 身は―身は

あしのうき葉のたつのもろ声

85 おきのうみひとりやきつるさ夜千鳥」(18才)

鳴音にまかふ磯の松風

千鳥のなくをよふけかたにきかんとおほし  
めしければいその松風にまかひてさたかに

なし千鳥おゝくさたかにきこえなをひ

とりやきつる松風にまかふとなり

86 日にそへてしけりそまさるあをつゝら

くる人もなきまきのいたとに

人のあとたへたるつゝらしける草なり

なにとなきむかしかたりに袖ぬれて

ひとりぬるよもつらきかねかな

ひとりぬるといふところに心をつけへし」(18ウ)

88 人心うしともいわしむかしより

くるまをくたくみちにたとへき

もろこしに大庵路有後道はひろしと

いへともくるまをたにもくたくれはなり我

心うしともいわしとなり

〔八五番歌―書陵部本ナシ〕

よふけ―さ夜更

さたかに―さたかにも

千鳥―衛の きこえなを―きこゆへきを

まかふ―まよふ

たる―たるなり〔て〕に〔た〕と上書き

つけへし―付へし

大庵路―大廣路 後―後後か

心―心に罪ありて流罪なされは人こゝろ

89 よそふへきむろのやしのまも遠ければ

おもひのけふりいか、まかへむ

よそふへきとはくらふへきと也

90 はれやらぬ身のうき雲をいとふまに

我世の月の影やそふけぬる

御しゆつくわいの御哥なり」(19オ)

91 みほのうみを月とともにや出ぬらん

をきの外山にふくるかりかね

おきのとをしまとはかりかりか音とをさかり

行なりするかのみほのうらを月とかりかねと

ともにいてたれば月の入までこゝにはなくて

月をはのこしかりはとをさかるほとにおき

の遠嶋にふくるかりか音となり

92 うしとたに岩波たかしよきしのかは

よしや世の中おもひすて、きすつへき

おもてのことし

ものーも

そやーそ

をきの外山に―奥の遠嶋

おきの―おき かりかりか音―かりかね

かりかねと―かりかねも

〔九二番歌―注14〕  
すすて、きつへき―捨てき

たかきし―高き

<sup>14</sup> 書陵部本では配列が異なり、91、93、97、92、98の順となっている。

93 われこそはにぬしまもりよおきのうみの」(19ウ)

あらし波風こゝろしてふけ

にるしまもりとはあたらしきしまもりや

94 おもふことなくてこゝろやなくさまんと

みやことりたにあらはとはまし

本哥のまゝのこるうたなり

95 ことつてんみやこまでもしきそはれて

あなしの風にまかふ村雲

これもものこるなり

96 とにかくに人のこゝろはみえはてぬ

うきや野守の鏡なるらん

のもりの鏡とは人の善悪をみる鏡なりこの」(20オ)

哥にうき事をのもりのかゝみとあそはし

たるは御よの時はいつれもおおそるゝほとに

人のせんあくもなし遠嶋の御時等閑なき

ものはまいり心さしなき人はまいらねはさ

てこそうきや野守の鏡なるらんとなり

97 ふるさとのこけのいわはしいかはかり

おきの―奥の

や―也

本哥のまゝのこるうた―残哥

て―は

のこる―残

は―は

御時―御時は

をのれあれども恋はたるらん

此岩橋とは雲井の橋など、いふなり紫震

殿などのかよひちの橋なるへしその橋も人

跡たゆればあをきこけ日にくあつくして

おのれあれどもとあそはしたる也」(20ウ)

98 おなし世にまたすみの江の月やみん

いまこそよそのおきつ嶋守

おなし世にとは御一世のあいたにといふき也

またすみの江の月やみんと禁中の月をみん

とのこゝろなり

99 なひかすはまたやはかみにたのむへき

おもへはかなしわかのうらなみ

和哥の浦とはにつほんをわこくといへはまた

やは神にたのむへきとはまたかへすへきとの

なり新国のくにてありつるを中ころより

もとのまゝに「空白」しかればにつほん」(21オ)

ものわれになひかすは新国へかへすへき

とあそはしたるなり

はたる―わたる

此―苔の 紫震―しゝん「古典文庫

「しん」と読む

あをきこけ―青苔

おき―輿

月やみんと―月やみんとは

たのむ―頼む

たのむ―たむく どの―との義

新国のく―神国

もとのまゝに「空白」―わ出になしたり

新国へ―神国に

100 とへかしな大宮人の情あらは

さすかに玉の緒たへせぬ身を

お、宮人とはたいり人なり

〔六行空白〕（21ウ）

よしきよか女かきあつめさせたらむ御哥の

みたきよし女房にいたくせめ申ければこの

御百首のうち点合たまひたる五十首を全て

はえられたる三首

哀なりにしきの戸はり引かへて

あまの苦屋は月もたまらず

天津風雲のうへよりななめこし

月も夢とやわれをみるらむ

おのつからおもふかたよりかよひこし

情―情

緒たへせぬ身を―緒たにけぬ世を

させ―られ（松書）

御哥の―御哥（森）

せめ申―せめ（書）

御百首―百首（書）

〔注15〕〔注16〕

〔注17〕

月も―月（松）

月も―月そ（書）

かよひ―さそひ（書）

15 点合たまひたる―てんあらわれたるを（松）―哀なるを（書）

16 五十首を―五十首を（森）―五十首（松）―〔ナシ〕（書）

17 全て―たる三首―書くはへられたりける三首（森）―書くせられたりける（松）―三首書つけられたりける（書）

うらかせたへてわふと告こせ

このはしめの御製は日吉の十首のうち也」(22才)

出雲の浦にてむかひの山に道のあまた

見え侍りけるを御らんして

都へとたれふみわけて過ぎけむ

むかへの山のみちもむつまじ

〔七行空白〕(22ウ)

御所の長哥

ふく風の たよりうれしく

みつくきの あとはつかしく

おもへとも 人のこゝろは

春かすみ 立へたゝりて

そのゝちは おもひやるさへ

18 たへて―たえて(森)―絶て(松)―たえず(書)

19 森文庫本、一行空白にして「此うち」―「御覧して」を書写し、一行空白にして「みやこへと」歌を書写。

20 日吉の―ひのえの(書)

21 松平文庫本、「出雲」で改行せず、「内也」に続けて書写。

〔注18〕 わふと―我に(書)〔注19〕

この―此うち(森松)―此うき(書)〔注20〕

〔注21〕 浦―浦半(書)

侍り―して―けるを御覧して(松)―たるを(書)

むかへ―むかひ(森松書)

はるくくと

ほとは雲井の

かりかねの

玉つさたにも

かきたへて

なきをとつれを

まつらかた

こゝろつくしの

君ゆへに

身はうさのみや」(23オ)

ますかゝみ

影をならへし

よなくくの

まくらのなみた

とこのちり

「空白」あへぬ

わかそでの

霜さむしろの

ひとりねは

つかはぬをしの

ならひにや

ゆめさへうすく

なりぬらん

なみたかはかぬ

こひころも

さみか過にし

ふるさとは

返してあとは

たひのやと

たゝかりそめの

草まくら

あたにむすふの」(23ウ)

神かけて

ちかひし事は

わすれきつ

たのむはあさき

こゝろとそ おもひなからも  
あふことの いつとなき身は  
七夕の まれにあふよの  
あまの川 わたりもあへぬ  
きぬくの 契うらやむ  
さかなさも とふ人あらは  
いわしろの 松風かよふ  
庭の萩木あづき 夢は草はの  
なをかへて 我はしのふの」(24才)  
かひもなく 人はわすれて  
とし月を ふるからをのゝ  
山ふかみ 雪ふみわけて  
いにしへの 人ならねとも  
わすれては 夢とそおもふ  
おもひきや あひみしときは  
もろともに いきてかわらし  
あたし世の おくれさきたつ  
かきりあれば こうの斤の

したまでも

ちかひしよはの

かねことも

うきいつはりに」(24ウ)

なるみかた

身をいつくにか

おきつなみ

あれのみまさる

ねやのうち

すみうかれたる

秋の月

ふけ行空は

おしけれと

君かあたりを

なにとなく

にしそときけは

よそへつゝ

かたふくかけの

いそかくれ

いる山のはそ

なつかしき

時雨るゝ空の

はれくもり

さためなき世の

かはりゆく

人のこゝろの」(25オ)

あき風に

涙の袖の

露ごとに

きへもはてなは

かくはかり

ものはおもはし

よしさらは

人のつら〔ま〕も

身のうさも

あとなき夢に

なるへきか ありしちきりの  
 たゝならて わすれかたみの  
 なてしこの まかきに花は  
 さき草の みつはよつはに  
 とのつくり いゑくさかふ  
 たのしみと つたへてきくも」(25ウ)  
 うれしきに のこらむことは  
 ありそうみの はまのまさこは  
 つくるとも かきつくすへき  
 筆あらし

〔七行空白〕(26オ)

なかむれは宇治の川せの朝霧に  
 とをさかり行舟(つま)おしそおもふ  
 さらしなやま(つま)の月もよそならん  
 たゝふしみ江の秋の夕くれ  
 哀てふ柴の庵はさひしきに  
 これやそゝろに山おろしの風  
 ふしみにやかりねのこの夢さめて

なくかなかぬ雁(つる)の一むら

千とせそとちきりし松の若みとり

なかめしまゝに十かへりの花

おもひきやなかめにあかぬみとり子の」(26ウ)

きれはきらるゝうるの二つや

松の名のいく千世もへんためしにも

国もゆたかにたみもさかゆく

〔八行空白〕(27オ)